

KALS NEWSLETTER 61

2020年8月

九州アメリカ文学会

事務局 九州大学大学院言語文化研究院内

福岡市西区元岡 744

〒819-0395

『才能あるリプリー氏』を遠隔授業で読む

藤野 功一（西南学院大学）

大学4年生のゼミの前期の遠隔授業で、パトリシア・ハイスミスの *The Talented Mr Ripley* (1955) を読んでみた。新型ウィルスのために、前期がすべて遠隔授業になり、いままで思いもよらなかった出来事-ニューヨークなど大都市のロックダウン、ジョージ・フロイドの死と Black Lives Matter 運動、そして九州を襲った未曾有の水害-が続くなか、このような推理小説を読むことにどれほど意味があるのかと思いながら、オンデマンドの授業を行っていたが、ちょうど作品を読み終わった時に一人の学生が、その結末についての感想として「知識ある人間が反知性的な人間を裁くことができなかったのだ。この点をすごく残念に思う... 正義は反知性主義にかなわないのか、それを考えさせる」と書き送ってくれたのを見た時に、時代と文学、あるいは時代と文化は確実に繋がっており、一見するとただの娯楽作品のような推理小説を読むという行為にも、それだけにとどまらない意味が付与されるのだということを、改めて学生から教えられたような心持ちになった。

現在、私と学生たちが目の当たりにしているのは、従来の知識（あるいは、正しいと思われてきたこと）が目の前にある問題を解決することができない、無念な有様である。新型ウィルス（COVID-19）の症状は、いままでの医学の知識だけでは説明できない。確立された治療法は、まだない。連日のデモと警官隊の衝突は、1960年代の公民権運動以来、アメリカにおける人種問題が正されていないことをあらわにする。自然災害は私たちの想定を超える。1963年に出版された『アメリカの反知性主義』で、R・ホーフスタッターは、現代人の直面している苦境がこれほどまでに痛々しい形で表面してきたのはなぜかを説明して、それは「これまで国内の物質的發展に専念し、多くの意味で単純だった国民が『平常』の関心ごとの外に引きずり出され、異質の荒波の世界へ投げ込まれ、極めて短期間に多くのことを学ばなければならなくなった」ためだと述べたが、彼の述べた状況は現在でもそれほど変わってはいないようだ。そしてこのような状況の中で、人々の注目を集めることだけに専心する為政者たちの言動は反知性的な傾向を強め、知識と知性への軽視を臆

面なく示しているかのように見える。

だが、この出口の見えない状況の中で、それでもなお状況をよりよくしてゆくために必要なのもまた、私たち自身が今後新たに獲得する知識と知性であるだろう。それはなかなか難しいことだが。ホーフスタッターの言うように、複雑で生々しい諸問題に突き当たると、人は、「そのほとんどの問題を判断する能力が自分にはない」と思いがちだ。そしてついうっかりすると、トム・リプリーの甘言に乗せられてしまうグリーンリーフ氏のように、重要な判断を他人に任せてしまう。グリーンリーフ氏は、ほぼ初対面であるにもかかわらず、いかにも自分に都合の良いことを言うリプリーをすっかり信用して、イタリアに行ったままのらくらしている道楽息子のディッキーを連れ戻してくれるように頼む。彼の父性の怠惰は、結局、自分の息子を失う悲劇を引き起こすものの、グリーンリーフ氏に、その結末を引き起こしたそもそもの原因が自分にあるという自覚は最後まで訪れない。

ハイスミスの作品の背後にあるのは権威主義的な父性への不信感だが、この作品でのリプリーの「才能」は、都合のよい情報だけを信用したがる怠惰な父性（あるいは、権威主義）に付け入り、それが聞きたいこと言い、そしてそれが望むように振る舞うところにある。この小説はルネ・クレマン監督、アラン・ドロン主演による映画版が有名であるため、この小説の邦訳の題名も映画と足並みをそろえて『太陽がいっぱい』となっているものの、やはり本来の題名そのままを訳した『才能あるリプリー氏』のほうが、内容をよく表しているだろう。この小説はまず何より、トム・リプリーという若者の才能のあり方に読者の関心が向く構成になっている。そしてそのリプリーの反知性的な才能を、従来の知識のみに頼る人々は、裁くことができずに終わるという結末が描かれる。それを残念だと思える学生は、遠からず、新たな知識と知性の必要性を自覚できるのではないだろうか。

『才能あるリプリー氏』を選んだのは、英語もそれほど難しくなく、筋の展開も面白いため、演習のテキストには適当なのではないかという理由からであった。ゼミの学生にはホーフスタッターの著作も紹介し、彼の論述が前提としている 1950 年代アメリカの反知性的な状況も話してはいたものの、正直なところ、アメリカにおける反知性主義の土壌とハイスミスの作品を結びつけるのは難しいのではないかと思っていた。そしてこの本をテキストに選んだ時には、原題の『才能あるリプリー氏』という少々奇抜な題名が指し示す内容がどのようなものなのか、自分でもはっきりしていなかった。私自身の中で、リプリーの才能がどのようなものであるかを明確にできたのは、冒頭の段落で引用した、学生の感想を読んだおかげである。遠隔授業によって、学生との対面による対話は叶わなくなったものの、そのぶん、教室ではつい聞き逃してしまう学生の個別の反応や言葉に、自覚的に向き合える機会も増えた。この状況の中でも、新たな知識や知性が生まれる可能性はまだあるのではないかと思っている。

2019 年度九州アメリカ文学賞 結果および講評

銅堂 恵美子（福岡大学）

九州アメリカ文学賞

該当者なし

佳作

大宅由加利（福岡大学大学院博士課程前期 2 年）

“Sterling’s Growth in *Almanac of the Dead*: Having a Keen Eye and Regaining the Old Ways”

（講評）

本年度は 2 篇の応募がありました。2 篇の論文はともに意欲的な研究でしたが、残念ながら文学賞の水準には至らないという結果となりました。しかしながら、1 篇については、明瞭な英語とテキストに向かう真摯な姿勢を評価し、合議の結果、佳作といたしました。惜しくも選外となってしまいましたが、意欲を持って挑戦してくれたもう一人の応募者には、審査委員一同を代表して心から感謝したいと思います。応募者には、審査委員からの詳細なコメントを送付しておりますので、ぜひ今回の論文の書き直しに挑戦し、別の形で発表を目指していただきたいと願う次第です。今年度の応募者数は、昨年度と同数という結果でしたが、来年度はさらに多くの大学生・大学院生からのチャレンジを期待しています。

この度の集中豪雨により特に大きな被害を受けられた熊本地区の皆様へ、心からお見舞い申し上げます。地区だよりにつきましては、すべての地区を掲載すべきですが、担当の都合もあり、以下の地区のご報告の掲載となりましたことをお詫びいたします。

地区だより

<沖縄地区>

加瀬 保子（琉球大学）

今年度より喜納育江先生から地区委員のお仕事を引き継ぐことになりました琉球大学の加瀬保子です。どうかよろしく願いいたします。喜納先生、長い間どうもありがとうございました。

7月に入ってからの記録的な豪雨により九州の多くの方々が甚大な被害を被り、お亡くなりになった方も多数出ております。また、目下、コロナ禍の再拡大も報道されております。ひたすら皆様のご健康と安全をお祈りするばかりです。沖縄地区の会員の活動もコロナ禍の影響を受けて、困難な状況にあります。しかしながら、それでも其々できうる限り様々に活動を行なっておりますので、以下、沖縄地区会員の近況と研究活動のご報告をさせていただきますたく存じます。

山里 勝己先生は名桜大学学長を任期満了で3月31日に退任なさり、4月からは同大学大学院国際文化研究科国際地域文化専攻（博士後期課程）にて特任教授として教鞭を執られておいでです。山里先生のこれから益々のご活躍を祈っております。

小林正臣先生は今年度より新たに科研費研究『エイハブたち：「ポストヒューマン」の諸相』を開始されました。その研究の一環として、日本英文学会会誌 *Studies in English Literature* に “The Will to Matter: Captain Ahab, the Cyborg” という論文を発表なさいました。また遡って2019年度にも、*American Research Journal of English and Literature* に、“Do the Electric Things Have Their Lives, Too? Philip K. Dick on Post-Humanity” を発表されており、大変精力的にご自身の研究を進めておられます。

喜納先生は新型コロナウイルス感染症による渡航制限が出る直前の2月半ばに1週間、台湾の研究者とともに、花蓮にある東華大学の先住民学部を訪ねられ、学内の共同研究プロジェクトのための調査をなさいました。ご専門であるアメリカ先住民文学で得た知見を軸に、「島嶼」の観点からハワイ先住民、台湾先住民、そして沖縄の比較文学研究を試みおられます。喜納先生は、アメリカだけでなく、アジアやオセアニア、カリブなど、同じ問題意識を共有する各地の先住民文学研究者との対話を重視し、ご自身のこれまでの研究をより発展させていく取り組みをなさっています。

加瀬は1月にシアトルで開催された Modern Language Association の年次大会に参加し、“ ‘Schizophrenia Doesn’ t Define Me.’ : Race and Cognitive Disability in *Everything Here Is Beautiful* by Mira T. Lee” というタイトルで発表して参りました。Medical Humanities と Disability Studies の連携の可能性と問題点について、cognitive disability をめぐる医学的、法的、社会的諸問題へのアジア系アメリカ人作家による問題提起を通して考察を行い、多くの研究者達と意見交換をしました。

今後しばらくコロナ禍が続くと思われませんが、沖縄地区では、お互いに刺激を与え合いながら、精一杯研究に勤しんで参りたいと存じます。

<鹿児島地区>

千代田 夏夫 （鹿児島大学）

千代田夏夫（鹿児島大学）より鹿児島地区の先生方のご報告です。千葉義也先生（鹿児島大学名誉教授）は『日本におけるヘミングウェイ書誌 [II] 2009-2018』（松籟社、2020）を編著者として出版されました。同書 [I] につづくご労作であり、日本のヘミングウェイ研究者にとって必携の書といえる二部が完成されました。竹内勝徳先生（鹿児島大学）はご研究の集大成ともいえる『メルヴィル文学における〈演技する主体〉』（小鳥遊書房、2020）

を上梓されました。ずしりと掌に響くご大著に、襟を正す思いです。森孝晴先生（鹿児島国際大学）はいつもご自身でご業績をおまとめくださいます。今回はそのまま頂戴した御文章を転載させていただきます。

「中四国アメリカ文学会と共催で6月に就実大学にて開催予定だった日本ジャック・ロンドン協会第28回年次大会は新型コロナウイルス感染予防のため中止になりました。本年3月に、ロンドンの知人で彼に影響を与えた薩摩藩士長沢鼎に関する2本の原稿が『鹿児島国際大学ミュージアム 調査研究報告第17集』に掲載されました。1本は論文「日本ワインのルーツに長沢鼎がいる可能性について」で、もう一本は九州国立博物館の川畑憲子氏と共著の講演会記録「漆の世界から見えること—長沢鼎と漆器の文化—」です。さらに昨年12月と本年6月の2回をかけて、ジャック・ロンドンの日露戦争従軍中の妻チャーミアンに宛てた34通の書簡の翻訳（完結。本邦初訳）を『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第20巻第3号と第21巻第1号に掲載しました。なお、鹿児島国際大学大学院博士前期課程をこの3月に修了し8月より台湾の大学教員となることが決まっている平田ひかるさんは、ロンドンと編集者に関する修士論文を書き、前述の論集の第20巻第3号にロンドンの短編「スロットの南側」の翻訳を載せています。また、同大学院博士後期課程の中国人留学生劉鵬さんはロンドンの中国人に対する意識を彼のいわゆる「中国人もの作品」の分析から明らかにする博士論文を書き上げ、鹿児島国際大学大学院より国際文化学博士号を授与されました。ジャック・ロンドン研究で課程博士号を取得したのは日本初と思われます。劉さんは、母国中国で大学教員になる予定です」と、ご研究のみならず学生のご指導にもまた、常にも増してのご活躍を拝見するところです。

生田和也先生（鹿児島女子短期大学）は、日本ナサニエル・ホーソーン協会学会誌『フォーラム』25号（2020）に、「『ホーソーンの最初の日記』における少年期の表象」を寄稿しておられます。千代田については昨秋コーディネーターを務めました日本ヘミングウェイ協会第30回全国大会シンポジウム「ヘミングウェイと法」におけるパネルを論文化した「実定法から書かれざる法—「最後の理想郷」から見る、ヘミングウェイ作品の〈ちゃんとしていない〉結婚」が、『ヘミングウェイ研究』21号（2020）に掲載される予定です。ご高覧賜れましたら幸いです。

<熊本地区>

池田 志郎(熊本大学)

おそらく他の地区も同様でしょうが、熊本地区でも4月以降の活動ができておりません。前号のNL以降、2020年2月に熊本地区では1回だけ研究会を開きましたので、ご報告いたします。

○第151回（2020年2月15日）熊本大学にて

題 目：『天の牧場』の孤児たち

発表者：馬渡美幸（熊本大学非常勤）

司会者：池田志郎（熊本大学）

*この「しばしば無視される」作品の中には後年になって注目される重要なテーマが見られるが、今回は 1) Munroe 家の存在理由、2) 後年の作品に共通するテーマ、3) 「孤児」に見る作者の人間観、が中心に論じられた。中でも、「人間すべてが孤児のような存在だ」という発表箇所には参加者も納得させられた。

なお、4月以降の研究会については、ZOOM 等での研究会も検討しましたが、一般市民を含めた会員各位の機器等の環境整備が十分にできないだろうということで、中止や延期状態になっております。まだ、見通しは立っておりませんが、今後の予定として挙がっているのは、映画 *Hidden Figures* について (BLM が注目される前に話題になりました)、*A Manual for Cleaning Women* について (かなり評判が良いようです)、などです。外出がままならないこの時期を、読書や映画に充ててみるのも良いことかもしれません。(ただし、前期に8コマを担当している身としては、大学の遠隔授業はとんでもない時間と労力を必要とするので、読書どころではない現実があります。)

今回の豪雨で熊本県は甚大な被害を被りましたが、他の地区も含めまして、災害に合われた方々にはお見舞い申し上げます。また、今後とも、充分にお気を付けください。

<北九州地区>

齊藤園子 (北九州市立大学)

世界規模での新型コロナウイルスによる未曾有の状況下で、インターネットとオンラインアプリケーションやツールを駆使しての遠隔授業や研究活動が進行中です。日々奮闘しているうちに、気がつけば文月です。日本英文学会や日本アメリカ文学会をはじめ、多くの学会や研究集会が通常とは異なる形での対応をしてくださっています。ちょうど、この地区だよりを書いている現在、10日間にわたる日本英文学会全国大会ウェブカンファレンスが開催されています。大会準備委員の先生方をはじめ、関係の方々には感謝申し上げますばかりです。

北九州地区では、北九州アメリカ文学研究会が、2月末の研究会の延期を余儀なくされましたが、着実に、会誌『北九州アメリカ文学』(*Kitakyushu American Literature*)の第7号を3月に発刊されました。お慶び申し上げます。また齊藤が、ヘンリー・ジェイムズによる初期の小説 *Watch and Ward* の本邦初訳となる『後見人と被後見人』(大阪教育図書)を上梓いたしました。アメリカのボストン、ニューヨーク、イタリアのローマを舞台に、ロジャー・ローレンスと孤児ノラ・ランバートを取り巻く人間模様が繊細に描かれています。訳していて、若いジェイムズによる、ニューイングランドの生活風景や習慣、異国ローマでの日々に関わる色彩豊かな描写にも心を打たれました。合わせてジェイムズ流のユーモアが楽しい作品かと思えます。解説、作品場面に関わる地図や訳者撮影の写真も掲載いたしました。ご高覧いただけますと大変幸いに存じます。

新型コロナウイルスと合わせて梅雨の影響が続いております。皆様にはどうかご自愛をお祈り申し上げます。

9月例会のお知らせ

コロナ禍の現状に鑑みまして、今回はウェブ上で例会を開催する運びとなりました。
9月5日(土)午後にお二人の研究発表を予定しております。

研究発表①前屋敷太郎（九州産業大学常勤講師）

「Mark TwainとAmbrose Bierceに共通する悪魔的ユーモア—*The Chronicle of Young Satan*を中心に」

研究発表②松原留美（九州産業大学常勤講師）

「神はどこにいるのか？ ヘンリー・ソローの自然と神の問題 — 19世紀後半の科学的知識と大衆の文学批評に比較して」

詳細が決まりましたら、KALSのメーリングリストでお知らせいたします。
いつもは遠方で参加できないという方も、ぜひお気軽にご参加下さい。

事務局からのお知らせ

1. 2020年度日本アメリカ文学会第59回全国大会は、10月3～4日に金沢大学で開催予定でしたが、7月5日付で「対面での開催」の中止が決定されました。詳細は本部ウェブサイトをご覧ください。
2. 日本英文学会第73回九州支部大会は、10月17～18日に西南学院大学で開催予定でしたが、7月15日付で「対面での開催」の中止が決定されました。代替措置としてウェブ・カンファレンス形式での開催に向け、準備を進めるとのことです。
3. 九州アメリカ文学会の第67回大会は2021年5月、九州大学で開催の予定です。
4. 2020年9月例会はオンラインで開催の予定です。詳細はおってお知らせします。
5. 『九州アメリカ文学』の投稿締切は6月末日まで延長されていました。編集作業もそれに応じて例年より遅れることが予想されますので、ご了承ください。
6. 2019年12月のサービス提供終了にともない、九州アメリカ文学会のメーリングリストが別のサービスに変更になっています。登録がお済みでない方は事務局長の岡本までご連絡ください。
7. 下條先生の転出にともない、今年度より会計は会長の高橋先生が兼任されます。会費に関する問い合わせは高橋勤 (tsutomu@flc.kyushu-u.ac.jp)、会費以外の件に関する問い合わせは岡本太助(okamoto@flc.kyushu-u.ac.jp)までお願いいたします。

(岡本 太助)

2020年度役員・委員名簿

変更を下線で示す

会 顧	長 問	高橋 勤 (九州大) 安河内 英光 山里 勝己 (名桜大) 小谷 耕二 (福岡女子大) 早瀬 博範 (佐賀大)
事 務 局 長 幹 事		岡本 太助 (九州大) <例会担当>坂井 隆 (福岡大) <例会担当>大野 瀬津子 (九州工業大) <大会担当> 高野 泰志 (九州大) <九州アメリカ文学賞担当> 銅堂恵美子 (福岡大) <ニュースレター担当> 江頭 理江 (福岡教育大)
会 監	計 査	<u>高橋 勤</u> 長岡 真吾 (福岡女子大)
編 集 委 員 長		池田 志郎 (熊本大)
本 部 代 議 員		高橋 勤 岡本 太助
本部大会運営委員		渡邊 真理子 (西九州大)
本部編集委員 (支部選出)		藤野 功一 (西南学院大)
本部サイト運営委員		高橋 美知子 (福岡大)
編 集 委 員		池田 志郎 田口 誠治 (尚絅大) 永尾 悟 (熊本大) 楠元 実子 (熊本高専) Scott Pugh (西南学院大) David Farnell (福岡大) Wayne Arnold (北九州市立大)
地 区 委 員		齊藤 園子 (北九州市立大) 鈴木 繁 (佐賀大) 山田 健太郎 (県立長崎シーボルト大) 池田 志郎 雲 和子 (大分大) 井崎 浩 (宮崎大) 千代田夏夫 (鹿児島大) <u>加瀬 保子 (琉球大)</u>
支部サイト運営委員		藤野 功一

2020年度年間行事予定

- 3月31日(火) 日本アメリカ文学会第59回全国大会 発表者応募締切
4月上旬 日本アメリカ文学会第59回全国大会 発表応募者選考
4月中旬 九州アメリカ文学会第66回大会 プログラム発送
4月30日(木) 『九州アメリカ文学』61号 原稿応募締切
5月9日(土) 九州アメリカ文学会第66回大会(九州大学)
研究発表、総会、講演会、懇親会
10日(日) 同上 シンポジウム
6月下旬 *KALS NEWSLETTER* 61号 発行/配信
8月中旬 第1回例会案内配信
9月上旬 第1回例会(未定)
10月3日(土) 日本アメリカ文学会第59回全国大会(金沢大学)
4日(日) 同上
10月17日(土) 日本英文学会第73回九州支部大会(西南学院大学)
「アメリカ文学部門シンポジウム」
18日(日) 同上
11月上旬 第2回例会・忘年会の案内配信
11月下旬 『九州アメリカ文学』61号 発行/発送
KALS NEWSLETTER 61号 発行/配信
12月上旬 第2回例会(未定)、忘年会
- 2021年
- 1月31日(日) 九州アメリカ文学出版助成金 応募締切
2月20日(土) 九州アメリカ文学会第67回大会 発表者応募締切
九州アメリカ文学賞 応募締切
2月下旬 九州アメリカ文学会役員会・文学賞選考委員会の案内発送
3月上旬 九州アメリカ文学会役員会(九州大学)
出版助成金選考/九州アメリカ文学会第67回大会発表者決定
九州アメリカ文学賞選考委員会
3月31日(水) 日本アメリカ文学会第60回全国大会 発表者応募締切
4月上旬 日本アメリカ文学会第60回全国大会 発表応募者選考
4月中旬 九州アメリカ文学会第67回大会 プログラム発送
4月30日(金) 『九州アメリカ文学』62号 原稿応募締切
5月 日(土) 九州アメリカ文学会第67回大会(大学)
研究発表、総会、講演会、懇親会
5月 日(日) 同上 シンポジウム
- ※以上は2020年3月現在の予定です。その後変更が生じています。

編集後記

九州アメリカ文学会の会長を長く務められました橋口保夫先生が、7月30日にご逝去されました。4月には小野和人先生ご逝去の報を受け、悲しみに沈んでおりました私たちにとしまして、更なる痛手となりました。九州アメリカ文学会の私たちを引っ張ってくださってきたお二人の先生に改めて感謝申し上げると共に、謹んでご冥福をお祈りいたします。

ニュースレター担当 江頭 理江(福岡教育大学)